

## 『カーラとディムナ』番外編「鳩と狐と鷺」と『伊曾保物語』下28「鳩と狐の事」再考

兵頭俊樹

Toshiki HYODO

(教育学部ドイツ語教室)

2015年10月14日受理

## 要約

本稿は、拙論「『伊曾保物語』下巻28「鳩と狐の事」とスペイン語版イソップと『カーラとディムナ』」(和歌山大学教育学部紀要－人文科学－第65集、2015)の続編であり、補足と訂正を含む。前稿では、『伊曾保』との関連で、スペイン語訳『カーラ』についてはもっぱらその15世紀の刊本について述べた。「鳩と狐」の話に関して『伊曾保』と『カーラ』の関係があるとすれば、それはこのスペイン語新訳であると考えられたからである。本稿では『伊曾保』との直接の関連はひとまず置き、13世紀のスペイン語旧訳(原本は失われたが15世紀の写本が2種)とその底本に近いと考えられているアラビア語写本の「鳩と狐と鷺」について考察する。このスペイン語旧訳は、ヘブライ語訳やラテン語訳や15世紀のスペイン語新訳よりも、はるかにアラビア語版に忠実だとされる。ただし、この旧訳は15世紀には——2種の写本が残るものの——忘れられていたらしく、新訳の刊本に取って代わられる。この新訳は16世紀の終わりまでに、サラゴサやブルゴスなどで約13の版があるという。こうしたことから『伊曾保』の「鳩と狐の事」は直接にはスペイン語旧訳とは関連しないと思われるが、旧訳がイベリア半島で口承によって、あるいは何らかの形で伝えられたことは考えられるし、直接の影響はなくても話の淵源を探る意味で比較は興味深い。スペイン語新旧訳とアラビア語写本を中心に、前稿でとりあげたヘブライ・ラテン・ドイツ語訳も含めて、最近の研究にも拠りながら、特に違いの著しい箇所を比較し、あわせて『伊曾保』の特徴を考えてみたい。<sup>1</sup>

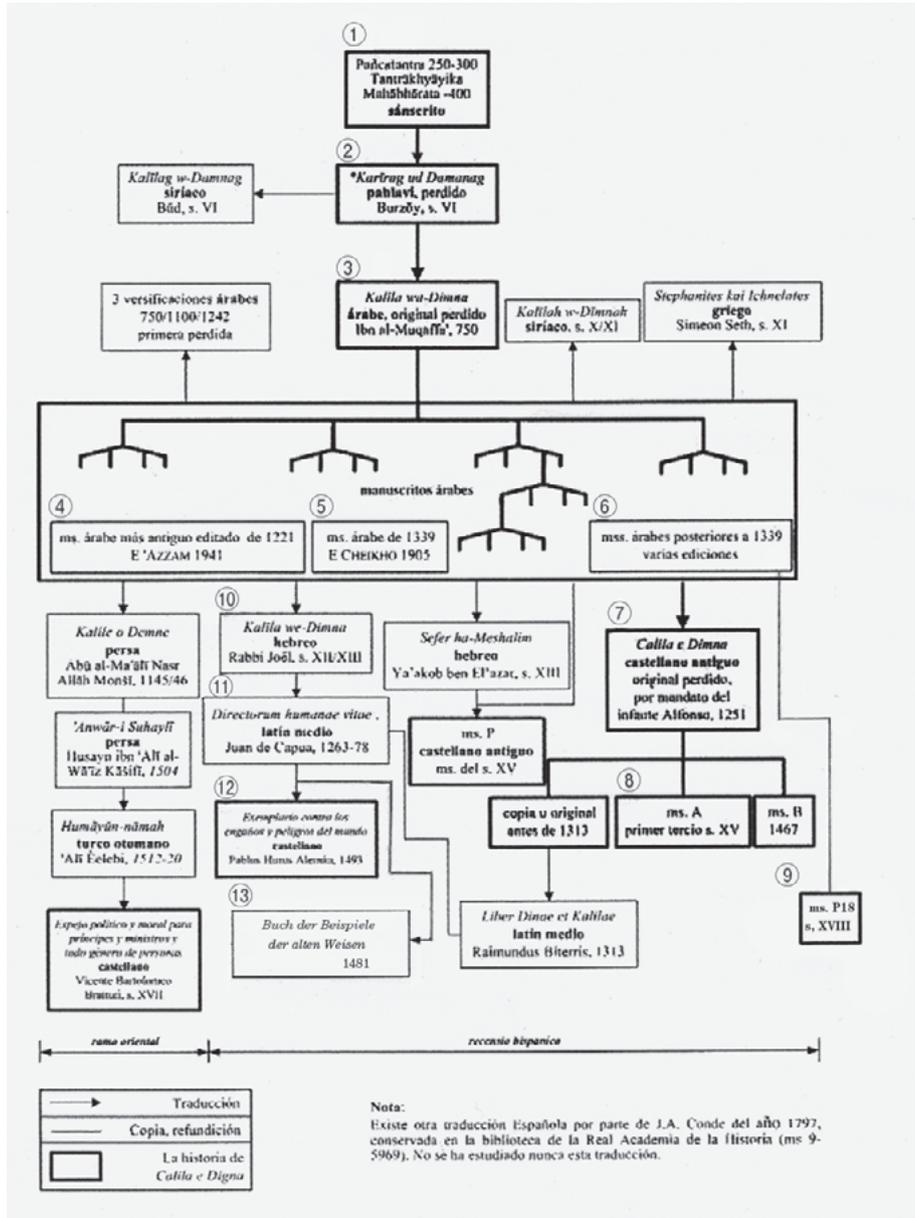
## I 写本、刊本、訳

菊池淑子訳『カーラとディムナ』(東洋文庫)1978の解説に、「アッザーム版以外の幾つかの版には……「鳩と狐とおさぎ」その他若干の小話が含まれている」(p.335f.)とある。<sup>2</sup>菊池訳はアッザーム版を底本としているので、この小話を含んでいない。アッザーム版(1941)は、最も古い写本(1221)に基づき、現在の標準となる校訂版で、次ページの表の④である。これよりひと昔前の標準は、シャイハウ版(1905)で、もう少し時代が下った写本(1339)に基づき、次ページの表の⑤である。上記の解説によれば「シャイハウは[···]写本の多くの誤りや不明な箇所を修正せず、東洋学者の比較研究の対象としてそのまま出版し、自分の写本にない物語は他から取って小さい活字で添付した」という。「いっぽうシャイハウは他本によって修正し、青少年向けの教科書を作ることを宣言したが、それが今日最も多く普及している改訂シャイハウ教科書版である。西欧でもそれを使用している大学が多い。」<sup>3</sup>

表は13世紀スペイン語訳『カーラ』の2つの写本を——アッザーム版などとの関係も含め——詳細に比較しているDöhla(2009)の表を借りたものである。アラビア語による「鳩と狐」は、アッザーム版とその底本となる写本④にも、シャイハウ版とその底本となる写本⑤にも含まれず、この表では⑥に属することになる。⑩⑪⑫⑬については前稿で扱った。⑦がスペイン語旧訳であるが、そのオリジナルは失われている。その写本が15世紀の⑧である。「鳩と狐」の話は⑧の写本Aに含まれ、Bでは導入部分のみで実質的に含まれない。スペイン語旧訳写本Aと内容が極めて近く、このスペイン語訳の底本に近いのではないかと考えられているのが⑨のアラビア語写本P18である。これは⑥のところに含めるべきかもしれないが、比較的遅い18世紀のものだと推測があるので表のこの位置に置く。<sup>4</sup>表の下は、前稿(106頁)での流れ図の体裁を少し変更し、上の表と番号を対応させたものである。

[ ]は「鳩と狐(と鷺)」の話が含まれないもの。\*は前稿で扱い、\*\*は本稿で主に扱うもの。書名は異なるものがあるが『カーラ』で統一した。

表 『カリラとディムナ』の翻訳・写本・刊本の系統 (Hans-Jörg Döhla) <sup>5</sup>



- ① インドの『パンチャタントラ』など（3－5世紀？）]
- ② [中世ペルシア（パフラヴィー語）訳（6世紀・散逸）]
- ③ [アラビア語訳『カリラ』（8世紀半ば）イブヌル・ムカッファ編訳]
- ④ [アヤ・ソフィヤ写本（1221）、その校訂本アッザーム版（1941）]
- ⑤ [写本（1339）、それに基づくシャイハウ版（1905）]
- ⑥ 現存する写本に関する限り1339以降の諸写本。その中に「鳩と狐と鷲」が最終章として追加された写本があったと想定される。
- ⑦ スペイン語旧訳（1251）。原本は散逸。
- ⑧ スペイン語旧訳（1251）の写本A（15世紀初めの3分の1）。\*\*<sup>6</sup>
- ⑨ アラビア語写本P18。\*\*
- ⑩ ヘブライ語訳（13世紀）\*
- ⑪ ラテン語訳（13世紀）\*
- ⑫ スペイン語新訳（1493-96）\*<sup>7</sup>
- ⑬ ドイツ語版（1480-83）\*

## II 鳩に助言する鳥

『伊曾保』において鳩に助言する鳥は、最初に「隣の鳩」として出た後は、「かの鳩に教へける鳥」「鳥」「かの鳥」などとなって、鳩なのかそうでないのかもはっきりしない。また狐の言葉の「あっぱれその事自由にし給ふにおゐては、誠に鳥の中の王たるべし」という表現からは、ある程度王としての風格をもった鳥が前提とされているようにも感じられる——雀や鳩のような小鳥が王と呼ばれるのにはどこか不自然さが残る。「隣の鳩」というのは「隣の鳥」がどこかで紛れたのではないか。もっとも「鳥の中の王」というのは狐が鳩をだますための追従の文句として割り切るべきかもしれないが。

鳩に助言するこの鳥は、スペイン語新訳では「向かいの木にいた鳥」(un páxaro que estava en otro árbol delante)<sup>8</sup>である。これに至るまでのヘブライ・ラテン・ドイツ語訳でも鳥ないし雀である。これに対しスペイン語旧訳では alcarauan とあり、現代の西和辞典にはイシチドリ、渉禽類の鳥とあり、鷺の類の鳥のようである。<sup>9</sup>現代語訳に airón がある。<sup>10</sup> アラビア語の本文はこの鳥を malik al-ḥazīn と呼び、その意味と由来は私にはわからないが、辞典・注釈などによると鷺のことだとある。邦訳『カーラ』の解説ではアオサギである。<sup>11</sup>

## III 巣の移動

『伊曾保』では、狐にだまされて鳩が子を地に産む(巣を地に置く?)。ところが狐に雛を奪われて驚き、巣をまた木につくる。鳩が地に巣を置く場面は近東・西欧版にはない。巣の移動に関しては共通項がありそうにも思えるし、やや違っているようにも思えるので、この点を少し考えてみたい。鳩が高いナツメヤシの木に巣を作り、そのために運ぶのに苦労したのは何なのかがテキストにより違いがあるようだ。

まず Derenbourg に従ってスペイン語新訳までの流れをたどる。鳩が運ぶものはヘブライ語訳では「草」(アサビーム pl.) である。「草」はアラビア語では(ウシュブ)であるが、この箇所ではアラビア語写本は「巢」(ウッシュ)とあり、Derenbourg はこれを誤りとし、これをを引き継いだスペイン語旧訳では「巣を移す」(mudar su nido) となったのだとしている。これに対し、ヘブライ語の「草」を受けて、ラテン語訳は「食物、餌」(esca) と訳し、<sup>12</sup> これを受けてドイツ語訳は「(雛たちの) 食物」(ir spyß) となり、スペイン語新訳は「食事」(el comer) となる。スペイン語新訳の系統のように、雛たちの餌として草を運ぶのいうか、それとも旧訳のように古い巣を捨てて新しい巣を構えるのを巣を移すというか。母鳥が運ぶ草を雛が餌として食うのなら、「餌を運ぶ」ともなるであろう。巣の材料となる枯草を運ぶとすれば、「巣を移す」でも「草を運ぶ」でもいいように思われる。アラビア語本文は参照したテキストが微妙に異なる。<sup>13</sup> 『伊曾保』の「木の上に巣をかけけり」というのは、スペイン語新訳系統の「餌を運ぶ」よりは、旧訳の「巣を移す」を想起させる。

## IV 狐が木に登ってきた場合の対処法

鳩がわが子である「雛を食らう」となっているのはヘブライ語訳とラテン語訳であるが、これに続くドイツ語訳では「雛をほかの木に運んでいく」、スペイン語新訳では「雛を委ねようと言う」というふうに穏やかで納得しやすい意味に代わっている。母鳩が自分の雛を食うという考えにスペイン語・ドイツ語の訳者はたじろいだのであろうか、と Derenbourg は述べている。<sup>14</sup> しかしこれはテキストの問題とも考えられる。鷺が鳩に対し、狐に言ってやれという文句には4つの動詞が含まれる。すなわち「それをする(=木に登ってくる)」「私の雛を食う」「お前から飛んで(逃げる)」「わが身は助かる」である。このうち、Derenbourg のテキストでは、最初の動詞のみ主語が2人称単数で条件文に入り、残りの三つの動詞は主語が1人称単数で帰結文に入る。これに従って訳せば、「もしお前が木に登ってきたなら、私は雛を食って、お前に捕まらないよう飛んで逃げて、この身は助かる」となる。これに対して、P18と教科書版は初めの二つの動詞が2人称主語で条件文に入り、後の二つは1人称主語で帰結文に入る。これには動詞をつなぐ接続詞 wa の位置も関係していると思われる。母音符号付きの P18 に従って、「もしお前が木に登ってきて私の雛を食っても、私はお前に捕まらないよう飛んで逃げて、この身は助かる」とするのが内容の点でも穏当なところであろう。狐に雛を食われるよりは、いっそ自らの手でと母鳥が考えたとするのも悲壮感が漂い捨てがたい気がするが。もっともこれは、狐に対しての牽制の文句に過ぎないととることもできるか。スペイン語旧訳は「私は息子たちを投げ与えたりはしない、もしお前が息子たちを狙って登ってきて食うことができないのなら、そうできないのなら、私はお前に一羽たりとも投げ与えたりはしない」<sup>15</sup>。旧訳は前半部で Derenbourg ではなく P18 のテキストの訳に近いと

は言えるが、狐に対し「お前が登ってきたら」ではなく、「お前が登ってこれないのなら」に変わり、これにより帰結部も「私は投げ与えたりしない」となる。<sup>16</sup>

## V スペイン語旧訳にしかない箇所

「～は言った、答えた」のような伝達動詞は別として、アラビア語本文にはなく、スペイン語旧訳にしかない箇所が三ヶ所ある。<sup>17</sup> 以下、太字の部分はその個所である。

(1) 「鳩はとても怖くなって、自分の命惜しさに、雛を狐に放り投げるのだった (echaua ge\_los)。雛を投げてよこさないのなら (ge\_los echase)、登って行って雛も鳩も食ってやるぞと狐が言ったからだ。」後半が、前半の根拠を示す説明になる。確かにこの部分がなければ、なぜ命が惜しいのかが少しわかりにくい。しかし、これが加わることで、同じ語の繰り返しも生じ、少しくどい感じにもなる。

(2) 誰から忠告をしてもらったのだという狐の問いにたいする鳩の答えの部分である。「川岸にいる鷺がそう私に言ったのです。」アラビア語本文では単に「マリク・ル・ハズィーンに教えてもらった」とある。これがあだ名のようなもので、鳩も狐もよく知っている鷺だとすれば、固有名詞と考えていいだろう。これをスペイン語に訳するときに、訳者は普通名詞の鷺に「川岸にいる」と限定する関係文を追加する必要を感じたのではないか。<sup>18</sup>

(3) アラビア語本文にも、スペイン語新訳にも、新訳に至るまでのその他の言語のどの訳にも見られず、スペイン語旧訳にしか存在しないかなり大きな箇所がある。狐が鷺のところへやって来て話を始める最初の部分で、全体の1割以上を占める。「やあ、こんにちは。ここで何を？ 私があなたに何を尋ねに来たかお分かりですか？ あなたがあらゆる天変から身を守る多くの術を心得ていると聞き、あなたに教えを乞いにやって来たのです。」すると鷺は、「私に何を教える？」狐は尋ねて、「足が寒いときにはどうされますか？」鷺は答えて、「片方の脚を挙げ、このように懐へ入れます。温まると脚を下ろして、もう一方の脚を懐へ。そうすれば大丈夫です。」<sup>19</sup> そしてこの後に、すでに前稿で見たように「風が右から吹けばどうする。頭はどこへ隠す？」「左へ」「左から吹けば？」「右へ」と続いていく。

このかなり大きな部分がアラビア語写本 P18 にないということはどういうか。いま P18 の基になった写本を仮に写本 X とする。考えられるのは、写本 X には (3) の部分があり、スペイン語旧訳はそれを忠実に訳し、P18 が写し損ねたか、それとも、もともと写本 X には (3) の部分はなく、したがって P18 にもなく、スペイン語旧訳がつけ加えたかであろう。

この (3) の部分は、構成の点でも現実味という点でも、あったほうがはるかに良いと考えられる。

構成の点では、狐の騙しの手口が見事になったと考えられる。これまでに見た版ではいずれも、狐は岸辺の鳥に向かってすぐさま、風が吹いたら云々という問いをぶつける。それがここでは、まず狐は挨拶を交わし、相手の様子を尋ね、その評判を持ち出して褒め、自分は教えを請いに来たとへりくだる。何をと尋ねられて初めて、足が寒いときどうするかと、さしさわりのないカムフラージュの質問をする。鷺が片足立ちになるのを確かめて、いよいよ本題の問いである。風をしのぐのに頭をどうするかと問い、鳥が左右へ首を振った後、羽の下に隠すのを見て、すかさず狐は鷺にとびかかる。出会っていきなり本題でも、シンプルな素朴さはあるといえるが、このようにワン・クッションを置くことで、騙しの手口が見事になる。

もう一つの点は鳥の生態の現実味である。たとえ文中で何の鳥かが名指されなくても、またマリク・ル・ハズィーンが何者なのか読者が知らなくても、(3) の部分が加わることでリアルさが倍増する。川岸か浅瀬で一本足で佇み、頭と首を羽毛の中に隠してしまう鳥といえば、鷺の種類が想像される。鷺の生態と特徴を踏まえたうえで考えだされたやりとりであり、鷺が想定されているからこそ成り立つ問答なのである。前稿ではドイツ語版の挿絵・版画をみたが、そこに描かれていたのは川岸ではあったが、雀か鳩の小型の鳥であった。かろうじて羽に首を隠すことはできても、片足立ちはできそうもない。長い首を伸縮させながら浅瀬を歩いたり、片足で佇み続ける大型の鳥で、どこことなく狐高さを漂わせるのがマリク・ル・ハズィーンなのである。

(1) (2) については翻訳の際に追加の必要が感じられた箇所として理解できる。このことを考えれば、(3) はアラビア語写本にあったかもしれないが、翻訳の際に訳者が読者の理解を考慮した追加と考えてもそう不自然ではないように思う。

風と寒さという自然の脅威からどう身を守るのかと、狐は問う。マリク・ル・ハズィーンは、片足で立ち首を羽に埋めて、自然の脅威からは身を守ることはできるが、狐の策略からは身を守れなかった。鳩には忠告を与えることが

できたが、自分への戒めを忘れた。『キャリアとディムナ』の本編が知恵者（哲学者、ファイラスーフ）から王へのアドバイスだったとするなら、最後に追加されたこの番外編は知恵者自身への戒めでもあったろう——王のブレンたる側近や知将は狐の籠絡には気をつけねばならないという。

### 前稿の訂正箇所

- p.109 [com]passión → [com]passión
- p.109 Heiderberg → Heidelberg
- p.110 Derenbourg 1887 → Derenbourg 1889

### 参考文献

- J. Derenbourg: *Johannis de Capua Directorium vitae humanae alias parabola antiquorum sapientum*. Paris 1889.  
 Hans-Jörg Döhla: *El libro de Calila e Dimna* (1251). Zaragoza 2009.  
 Munther Younes: *Kalila wa Dimna: For Students of Arabic*. 2013.  
 L. Cheikho: *Kitāb Kalīlah wa-Dimnah*. 1922.  
 Abdalá Benalmocaffa: *Calila y Dimna. Introducción, traducción y notas de Marcelino Villegas*. Madrid 1991.  
 M.H.Cortés (ed.): *Exemplario contra los engaños y peligros del mundo*. Valencia 2007.  
 F. de Blois: *Burzōy's voyage to India and the origin of the book of Kalīlah wa Dimnah*. London 1990.

### 注

- 1 主に J. Derenbourg: *Johannis de Capua Directorium vitae humanae alias parabola antiquorum sapientum*. Paris 1889 と Hans-Jörg Döhla: *El libro de Calila e Dimna* (1251). Zaragoza 2009 に依拠する。前者はラテン語訳のテキストにその仏訳を併記し、注として諸版の違いの著しい箇所を比較している。後者はスペイン旧訳写本 AB を中心として比較し、アッザーム版や P18 との異同、詳細な語彙の考察を含む。近世初期から中世にまたがって各言語のテキストが関連してくるが専門外の範囲が広く、現代語訳や他の言語への訳があるものは可能な範囲で参照したが、細部については専門家の指摘を待ちたい。正確を期する意味でできるだけ原文は併記する。
- 2 前稿ではこの箇所に気づかず、アラビア語版「鳩と狐」については Derenbourg の仏訳に拠った。
- 3 本稿ではこの小話に関し、上記の Derenbourg のテキスト（1889: 346-349）、写本 P18、シャイホウ版教科書 L. Cheikho: *Kitāb Kalīlah wa-Dimnah* (1922)、最近の学習用テキスト M. Younes: *Kalila wa Dimna: For Students of Arabic* (2013) を参照した。
- 4 P18 は François de Blois (1990: 72) によるパリ写本の通し番号で Bibliothèque nationale, Paris. Arabe 3478, supplément 1795. Döhla (2009) もこの P18 という表記を用いているので本稿もこれにならう。
- 5 Döhla (2009: 87) に説明の都合上丸付き数字を入れた。また同書 88 頁の表によりドイツ語版③を、102 頁以降の記述から写本 P18 ⑨を加えた。
- 6 「鳩と狐と鷺」のテキストは Döhla (2009: 480-484) による。
- 7 前稿で『伊曾保』の「鳩と狐の事」と関連があるのではないかとしたのは、このスペイン語新訳である。この表と関連付けて前稿の『伊曾保』を組み入れれば、ドイツ語版『キャリア』（1480-83）→ スペイン語版『イソップ』と『キャリア』の合本 [1541], (1546) → 国字本『伊曾保』と天草本『イソポのハブラス』の基になったと存在が推測される親本? } (1580 年代?) → [天草本『イソポのハブラス』（1593）]、国字本『伊曾保』（17 世紀前半）。なお M.H.Cortés (2007: 52) によれば、スペイン語版の『キャリア』とイソップ寓話の合本は [1541], 1546, [1550], 1621 年の 4 つの版が確認されている。
- 8 M.H.Cortés (2007: 275)
- 9 Martín Alonso Pedraz : *Diccionario medieval español*. I 218 : Ave zanduca [zancuda?] de cuello largo y cola pequeña, tarsos amarillos, alas blancas y negras, vientre blanco, el resto del cuerpo rojo y la cabeza de color negro verdoso.
- 10 Abdalá Benalmocaffa: *Calila y Dimna*. (Introducción, traducción y notas de Marcelino Villegas. Madrid 1991. p.298.)
- 11 H. Döhla (2009: 517f.) を参照。H.Wehr: *A Dictionary of Modern Written Arabic* では mālik の項に mālik al-ḥazīn は

heron とあり、A.Wahrmund: *Handwörterbuch der neu-arabischen und deutschen Sprache* では ḥazīn の項に mālik al-ḥazīn は der Reiher とある。Derenbourg のテキストは malik el-ḥazīn と音写し、教科書版 Munther Younes: *Kalila wa Dimana for Students of Arabic* は mālik. 写本 P18 では ḥ が j となって malik al-jazīn とあるが、Döhla (2009: 518, n.85) はこれを誤りだろうとしている。前稿では「悲嘆にくれる王」とした。ḥazīn は形容詞として「悲しい、悲嘆にくれた」という意味ではあるが、この箇所は定冠詞がつき属格。なお前稿ではこの点に関し以下のページを参考にした。R.Neil Hewison: *The Fayoum. History and Guide. New Revised Edition. Cairo 2008. p.16: The most common bird, as almost anywhere else in Egypt, is the cattle egret, abu qurdân (…)* Thousands of abu qurdân roost in the palms and trees (…). A relative of the egret, the grey heron, is sometimes seen along canals; it is known in Arabic as ‘the sad king.’ The wide-eyed, long-legged stone curlew lives in the deserts (…).

YouTube に *Kalila Wa Dimna The chapter of Dove Fox and Snow Egret SD* というタイトルで抒情的な朗読と動画がある。

12 Derenbourg (1889: 320)

13 Derenbourg (1889: 347)

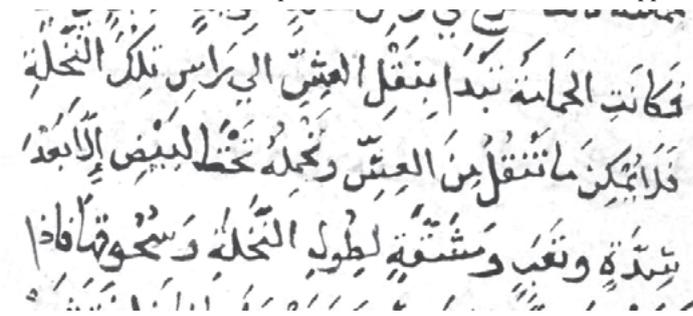
فكانت الحمامة اذا شرعت في نقل العش الى رأس تلك النخلة  
لا يمكنها ذلك الا بعد شدة وتعب ومشقة لطول النخلة  
ومحوها فاذا فرغت من النقل باصت ثم حضنت بيضها

(大意)「鳩が棗椰子の葉叢へ巣の引っ越しをしようとする、木は高く聳えているので、それがまた一苦勞だった。」  
Cheikho 教科書版 1922 p.286 も同文。

M. Younes: *Kalila wa Dimna: For Students of Arabic. 2013.p.265.*

قال الفيلسوف : زعموا أن حمامة كانت تفرّخ في رأس نخلة طويلة ذاهبة في السماء، فكانت الحمامة تشرع في نقل العش إلى رأس تلك النخلة فلا يمكنها أن تنقل ما تنقل من العش وتجعله تحت البيض إلا بعد شدة وتعب ومشقة لطول النخلة وسحقها، فإذا فرغت من النقل باصت ثم حضنت بيضها، فإذا

P18 パリ写本 = Bibliothèque nationale, Paris. Arabe 3478, supplément 1795. 208v.



M.Younes と P18 は描写が少しだけ詳しいが、両者の間にも数語の語句に違いがある。

(大意)「鳩が棗椰子の葉叢へ巣の引っ越しを始めていた。ところが、木は高く聳えているので、卵の下へ巣を分けて運ぶのは一苦勞だ。」

Derenbourg (1889: 327. n.5) は「巢」の第 1 音節に母音 u の記しているが、P18 では i である。スペイン語旧訳は簡潔で、et la paloma para mudar su nido ally auia grant trabajo, tanto era de alta. 「鳩はそこへ (= ナツメヤシのてっぺんへ) 巢を移すのに大変苦勞していた。それほどヤシの木は高かった。」巢の移動の簡潔な描写という点では Derenbourg のテキストに近いようである。

14 Derenbourg (1889: 321, n.6) : G et I auraient-ils reculé devant la pensée que la mère mangerait elle-même ses petits? [G : スペイン語旧訳 Gayagon (ed.) 1860. I : ヘブライ語訳 Joel (tr.) ]

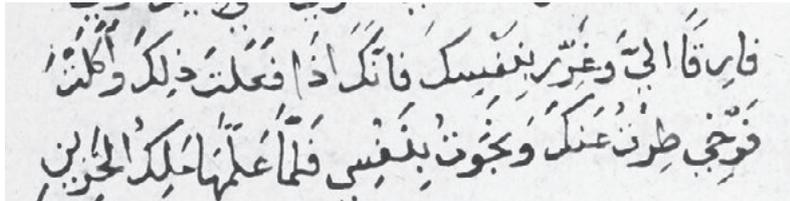
15 “Quando veniere a fazer lo que dizes, dile tu: ‘Non te echare mis hijos, sy non que subas por ellos e que\_ los comas, e sy non, yo non te echare ninguno.’ ” (Döhla p.481)

16 Derenbourg p.348

فَرَحِي فَارِقَ إِلَىٰ وَغَرَّرَ بِنَفْسِكَ فَإِذَا فَعَلْتَ ذَلِكَ أَكَلْتَ  
فَرَحِي وَطَرْتُ عَنْكَ وَنَجَوْتُ بِنَفْسِي فَلَمَّا عَلِمَهَا مَلِكُ الْحَزِينِ

「あなたがそうしたら (=登ってきたら)、私は私の雛を食って……」

P18, 209r



「あなたがそうして (=登ってきて) 私の雛を食ったら……」

17 Döhla p.480-484 の 4c, 12-16。

18 前後も含めて「川岸」に関する部分を対照してみる。アラビア語本文は、1) 鳩にそう教えるとマリク・ル・ハズィーンは川岸へ飛んで行った 2) 鳩は言った「私はマリク・ル・ハズィーンに教えたもらったのです」3) 狐は川岸のマリク・ル・ハズィーンのところへ向かって行った。

いっぽうスペイン語旧訳は、1) このように忠告すると鷺は川岸へ飛んで行った 2) 鳩は答えた「川岸にいる鷺がそう私に言ったのです」3) 狐は鷺を探しに行き、たたずむ鷺を見つけた。

19 “Dios te salue, amigo. ¿Que fazes aqui? ¿Sabes por que te vine a buscar? Por que me dixeron que sabes muchos bienes para se guardar omne de\_los açidentes de\_los ayres del çielo, et vine a\_ty por decoger algunt bien de\_ty.” Et dixo el alcarauan: “¿Et que quieres saber de\_mi?” Dixo la gulpeja: “Quando has frio a\_los pies, ¿Que es lo que fazes?” Dixo el alcarauan: “Alço el vn pie e meto\_lo asy a carona de\_mi vientre. Et quando aquel es caliente, alço el otro e quito aquel; et sufro\_me desta guisa.” Döhla (2009: 482)。Döhla はアッザーム版にも写本 P18 にもない部分をスモール・キャピタルにしているが、ここでは通常の表記に戻した。